

セリーヌ『リュセット・テトゥーシュとミケルセン 先生への獄中書簡』

木下, 樹親

<https://doi.org/10.15017/10033>

出版情報 : Stella. 19, pp.157-160, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

セリーヌ『リュセット・デトゥーシュと ミケルセン先生への獄中書簡』

木 下 樹 親

第2次大戦での敗北が必至のドイツを離れたセリーヌは、妻リュセット、愛猫ベベールとともに幾多の空襲をかいくぐり、1945年3月デンマークに入国した。コペンハーゲンの知人宅に身を潜めたものの、同年秋、彼の所在を暴く匿名投書がフランス公使館によせられ、これを機に両国間の外務交渉がおこなわれたが、結局は年末に逮捕された。国家反逆罪の嫌で春に出されていた逮捕状にもとづく執行であった。即刻ヴェストレ・ファンゲセル刑務所に投獄されるが、フランス側の再三の引き渡し要求にもかかわらず、デンマーク当局がこれを拒み処遇決定を保留しつづけたため、セリーヌの獄中生活は47年6月、許可なくデンマークを離れないという条件のもとに正式釈放されるまで、1年半の長きにわたるものとなった。

本書『リュセット・デトゥーシュとミケルセン先生への獄中書簡』は、収監中の作家が妻とデンマーク人の担当弁護士トルヴァルド・ミケルセンに宛てた書簡集である¹⁾。かつてミケルセン財団のアルシーヴでこれらの書簡を発見したフランソワ・ジボーはすでに自らのセリーヌ伝のなかでも多くの断片を引用していたが、セリーヌが人生で最も辛酸をなめた時代の赤裸々な証言として資料的価値が明白なだけに、200通余からなるコーパス全体の刊行が強く望まれていた²⁾。刑務所という特異な環境のなかでセリーヌが巡らせた思考の数々は、たんに現実問題への対処を伝える実証的資料であるにとどまらず、以後の創作活動の原動力となったといっても過言ではない。そうした二重の情報源という意味で本書出版の意義はきわめて大きい。もちろん今回も校訂を担当したのはジボーである。

そもそもセリーヌ夫妻はビザ無しでデンマークに入国していたので、申請手続きの助力を請うためにミケルセン弁護士と知己を得たのであった。したがっ

て逮捕されるまでにセリーヌが彼に宛てた10通は大半がその旨を訴えるもので、逮捕後の文面にくらべると総じて短く、これといった特徴も認めがたい。とはいえ45年5月付の1通目は、のちに頻出する内容を予告している点で注目値する。そのなかでセリーヌは自身を他国への亡命を余儀なくされた著名なフランス作家たちと同列に位置づけ、滞在許可取得のために関係官庁へのとりはからいを懇願している。これは入獄後の書簡における重要な要素、すなわち自己弁護の萌芽的態度にほかならない。

セリーヌは自分が無実であり、逮捕・投獄がいかに不当であるかを滔々ときには激越した調子で語る。その主旨は以下のように要約されよう——①自分は医者および作家としての資質に貫かれた人間である、②なんらかの政治活動に身を投じたことは生涯をとおしていっさいない、③44年6月以降、やむをえずドイツに滞在した間は、自腹を切って同胞の治療に専念していた、④反ユダヤ主義文書執筆の目的は、信念である平和主義にもとづき、戦争回避を促すことにあった、⑤ユダヤ人を非難したのは、彼らが戦争を引きおこす張本人であると考えられたからだ。要するに一貫して祖国を守るために行動したのであり、国家反逆罪などんでもないというわけである。このような主張がセリーヌには筋道のとおるものであっても、一般の目には詭弁としか映らなかったのはいうまでもない。とりわけユダヤ人にかんする見解がそうだ。反ユダヤ主義を人類の歴史と同じくらい古いと正当化したうえでセリーヌは、文書ではそれを極度に滑稽に、かつあくまでも文学の範疇で表現したにすぎず、したがってユダヤ人迫害にはあたらないというのである。たしかに彼が他者の直接的迫害に荷担した事実は皆無だが、ペンがおよぼす影響を著しく軽視しようとするこうした弁明は、戦後の粛清期にかぎらず、左翼系知識人の神経を逆撫でするばかりであろう。本書の出版が多くのマスコミから敵意と揶揄をもって迎えられた理由はここにある³⁾。

さらに興味深いのは、セリーヌが長びく獄中生活へのいらだち、不満や怒りをあらわにしなが、被害者意識を研ぎ澄まさんばかりに強めている点だ。じっさい、腸炎やペラグラ病、体重激減といった身体的な苦痛・衰弱の影響もあってか（病状悪化のため、46年11月と47年2月に市内の病院へ移送）、彼はいたずらに続く未決状態を周囲の官憲による敵意の産物だと見なし、ときにはユダヤ人による復讐なのだとさえ断言する。そして甚大な迫害を被っている

と確信したこの囚人は、程度の差こそあれ対独協力していたのに戦後もなに食わぬ顔で文壇の中心に居すわる作家たちへ、ひいては人類全体へ呪いのことを吐き散らすのだ。

しかし穿った見方をすれば、セリーヌはこうした宙吊りの状況を自虐的とはいえ享受していたのではないか。というのは、屈辱の体験における憎悪のエネルギーはそのまま小説『またの日の夢物語 I・II』の執筆に注入されているし（本書には、この作品のラフスケッチやタイトル案の変遷など、生成学上の貴重な資料も含まれている）、小説家として新たなスタートをきるための起爆剤の働きをしていると思われるからだ。また類似した境遇にあったフランス作家の存在も、セリーヌに創作活動への強い欲求をいだかせたにちがいない。そのことは、ロマン主義の先駆者シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』を差し入れてもらい歓喜するようすや、人類を痛罵した点においては先輩といえるカトリック作家、「忘恩の乞食」ことレオン・プロワを驚きをもって発見し、彼にかんする情報を求めるようすなどに窺えよう。とまれ、先述した自己弁護の要旨①がパンフレ作家としての側面を希薄化する目的でのみ発せられたわけではないことは認めねばなるまい。

本書を通読すると、失われてしまった外界とのつながりをただ書くことによって回復しようとする、背水の陣ともいえるセリーヌの意志が感じられる。フランス語を解する人であるならば、たとえ憎悪の対象にしかかなりえない敵であっても話しあいたいと記しているほどである。だが彼の孤独は妻と離ればなれにさせられたことにも起因するようだ。面会は週1回、たったの10分間にかぎられ、しかも彼女は夫の体調と将来を気づかうあまり痩せ細っていった。そこでセリーヌは、これからの法的闘争に備えフランスの知人とのコンタクトを緊密にするよう指示を出すだけでなく、妻を励まし彼女への深い愛情を伝える書簡を大量に送ったのだ。

90年代に入って、ジャン・ポーランやロジェ・ニミエへの書簡をまとめた『NRF への書簡』や、長編第2作『なしくずしの死』らしい秘書兼タイピストをつとめたマリー・カナヴァッジアへの書簡など⁴⁾、大部の書簡集があいついで刊行され、セリーヌ研究の資料体は飛躍的に拡大した。本書をそれらと比較すると、最も親しい相手への内密な書簡であるだけに、作家の深奥からの生の声を聴取できる資料として群を抜いている。今後はセリーヌの書簡にかんする

研究がふえてくるだろうが⁵⁾、作家の暗黒時代を証言する本書は当然そこでも重要な位置を占めることになるだろう。

註

- 1) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Lettres de prison à Lucette Destouches et à Mattre Mikkelsen, 1945-1947*. Édition établie, présentée et annotée par François GIBault. Paris: Gallimard, 1998, 406 pp.
- 2) Voir François GIBault, *Céline, III. Cavalier de l'apocalypse 1944-1961*, Paris: Mercure de France, 1981. 付言すると、さらにわずかな抜粋が『ランフィニ』誌と『マガジン・リテレル』誌のセリーヌ特集号にあいついで掲載された——Louis-Ferdinand CÉLINE, «Lettres de prison à Lucette Destouches», *L'Infini*, n° 43, 1993, pp. 51-66 ; «Lettres de prison», *Magazine littéraire*, n° 317, janvier 1994, pp. 54-57.
- 3) Voir *L'Année Céline 1998*, Tusson: Du Lérot / Paris: IMEC, 1999, pp. 79-81.
- 4) Louis-Ferdinand CÉLINE, *Lettres à la N.R.F., 1931-1961*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal Fouché. Paris: Gallimard, 1991; *Lettres à Marie Canavaglia*. Édition établie, présentée et annotée par Jean-Paul Louis. Tusson: Du Lérot, 3 vol., 1995.
- 5) たとえば書簡を射程に入れた既存の研究として、ジョアンヌ・ベナールのものが挙げられる。彼女は博士論文にもとづく近著のなかで、セリーヌが単に実体験を小説の題材にただけでなく、小説で描いた特徴的テーマ、すなわち迫害される主人公のありさまをインタビューや書簡に還元し、虚実ないまぜの発言をつづけたことを論証した。これはセリーヌのエクリチュール総体に新たな自伝形態を読みとろうとする大胆な考察である。Voir Johanne BÉNARD, *L'Inter-dit célinien. Lecture autobiographique de l'œuvre de Louis-Ferdinand Céline*, Montréal: Les Éditions Balzac, coll. «L'Univers des discours», 2000.